

テキストジャンルによる翻訳プロセスの違い

—内観報告の計量的比較分析—

石原知英

(愛知大学)

This study aims to describe the differences in the translation processes based on the text genres. Among 21 university students, 6 translated a poetic text, 6 translated a narrative, and the other 9 translated a newspaper article. Retrospective verbal reports on what the participants thought during the translation were collected and subsequently analyzed quantitatively. The main findings are as follows. (1) Participants who translated poetic and narrative texts paid more attention to producing translated words and sentences, while those who translated a newspaper article paid more attention to comprehending the content of the article. (2) In addition, the former stopped more often at rather easy words, whereas the latter stopped mainly at difficult words. (3) Translating a poem seemed to induce source-text orientation, whereas translating a narrative and newspaper, target-text orientation. (4) Participants who translated a poem made more changes to their translation than those who translated a newspaper article.

1 はじめに

本稿は、協力者の回顧的な内観報告をもとに、3つのテキストジャンル(詩、小説、新聞記事)の翻訳プロセスの違いを、計量的な比較により論じる。そうすることで、翻訳研究の観点からは、テキストジャンルによる翻訳プロセスの違いを実証的に明らかにすることを目指し、英語教育の観点からは、ことばへの気づきが生じやすいテキストを同定するという意味で翻訳タスクの再考に資することを目指している¹。

2 理論背景

2.1 文学性の問題

テキストジャンルについて論じる場合、文学とは何か、という問題は避けて通ることができな

ISHIHARA, Tomohide, "Differences in Translation Process According to Text Genres: Quantitative Analysis of Translators' Retrospective Verbal Reports," *Interpreting and Translation Studies*, No.10, 2010. pages 85-101. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

い。

ロシア・フォルマリズムやプラーク学派は、日常言語(Standard language)と詩的言語(Poetic language)を区別した。詩的言語とは「了解に手間取るようにされた、歪められた言語表現」(シクロフスキイ, 1917/1988, p.34)であり、そうした言語は、異化(Defamiliarization)による非自動化(Deautomatization)(Mukarovsky, 1932/1964; ムカジョフスキー, 1938/1982)という機能を持つ。Jakobson(1960)は、異化によって引き起こされる非自動化された読みが言語そのものへ志向することを、言語の詩的機能(Poetic function)と捉え、この機能が優勢(Dominant)なテキストを文学テキストであると考えた。

こうしたテキスト中の修辞技巧に文学テキストの特徴を求める考え方の一方で、読者および読み方に文学性を見出す考え方もある。例えば、一般的には文学と考えられるようなテキストでも、登場人物の人数を数えるなど、情報を拾うように読むことも可能である。一方、新聞記事などでも、例えばヘッドラインなどにしばしば見られるように、修辭的な文体が採用されることもある。読者反応理論の流れを汲む Rosenblatt(1978, 1985)や Vipond and Hunt(1984)が議論しているのは、読み方(より正確には、読者が採るテキストを読むモード・情報処理の方法によって引き起こされた読みの経験)により、文学性が立ち上がるという考え方である。

これまで van Peer(1983)や Miall and Kuiken(1994, 1996)、Hanauer(1999, 2001)、Zwaan(1996)などの実証的な研究により、文学テキストには、文学的な経験や集団、教養などの差に関わらず、多くの読者が共通してひっかかる(立ち止まる)箇所が存在することが例証されてきた。先のテキスト対読者という二元論的な問題意識から見ると、テキストによる文体的な特徴が読者にある種の読み方を要求すると捉えることができる。つまり、どのような読者であれ、テキスト中に存在する反復(Parallelism)や逸脱(Deviation)による文体の異化作用により(また、それらが読者に気づかれることにより)、自動的な意味理解が妨げられ、こだわって読む(その言語形式にテキストの内容理解を結び付け、明示されない意味まで読み取ろうとする)ということである。

2.2 翻訳プロセスとテキストジャンル

この文学性の議論を読みの問題から翻訳の問題へと拡張すれば、テキストジャンルによって翻訳プロセスが異なる可能性があるということは、十分妥当であるように思われる。

一般に翻訳では、言語が異なる 2 つのテキストにおけるある種の等価を目指のであるが、その一方で、完全な一致は到達しえないとも言える。なぜなら 2 言語間において(あるいは同一言語内であっても)、言語の形式と意味が同時に一致することが、少なくとも理論的にはありえないためである。そのため現実の翻訳過程では、翻訳者の能力・意志・判断を総動員した取舍選択の必要性が生じる。そこで翻訳者は、「対応の優先順位の判断」(Holmes, 1978/1994)を行うのであるが、その際にテキストジャンルは重要な役割を果たすと考えられている。

Reiss(1981/2004)は、翻訳の意思決定における判断順序を、テキストタイプ(Text type)、テキストバラエティ(Text variety)、テキストスタイル(Text style)の順に 3 つのレベルで捉えている。

ここでいうテキストタイプは、ビューラー(1934/1983)による言語の3つの機能である、「叙述」、「表出」、「呼びかけ」を踏まえている。すなわち(1)内容の伝達を目的とする「叙述タイプ」、(2)芸術的に構築されたメッセージの伝達を目的とする「表出タイプ」、(3)相手に働きかけるような伝達を目的とする「呼びかけタイプ」の3つの機能である。

テキストタイプは、そのテキストにおいて用いられている言語やタイトル、ヘッドライン、あるいはテキストの媒体などにより総合的に判断されるが、これはあるテキストがこの3つの機能のうちの1つに分類されるということを意味しない。むしろ多くのテキストは3つの機能が交じり合った状態で存在しており、3つの機能のうちどの機能が優勢であるか、といった判断がなされる。また、あるテキストのテキストタイプは時代によっても捉え直しが起こる可能性があり、常に再訳の可能性が拓かれていることにも注意が必要である。

テキストバリエティは、テキストを当該言語文化における社会言語学的な特徴によって区別するものであり、言葉のレジスターに大きく関わる。例えば、新聞記事といった情報伝達のテキストでは、高級紙に取り上げられた政府の公式見解に関する記事であるのか、あるいはゴシップ記事であるのか、という区別である。

テキストスタイルとは、個々のテキストに固有の表層的な特徴であり、いわゆるテキストの個性、あるいは文体の問題である。

Reiss(1981/2004)が指摘するように、翻訳者は、基本的に上述のテキストの機能を保つという意味での等価(Functional equivalent)を目指すことになる。叙述タイプのテキストの場合、翻訳のモードは、意味や意義に即して伝えることであり、必要に応じて説明的に訳されることになる。表出タイプのテキストの場合、その表現の方法の同一化が優先され、その表現の解釈によって(すなわち、作者の意図の受容によって)訳されることになる。呼びかけタイプのテキストの場合、目標文化へ適応的な訳の方針が採用され、その効果の等価(すなわち受け手に与える影響および説得力)が目指されることになる。

2.3 記述的な翻訳プロセス研究にむけて

起点テキストのテキストタイプ(あるいは機能)を保持しながら翻訳がなされるとき、翻訳プロセスにおけることばへの気づきや翻訳における葛藤の惹起の度合いは、そのテキストタイプによって異なると考えることができる。

平子(1999)が指摘するように、法律の文章や科学論文などのように、読者の多様な解釈を拒否し、意味が固定されやすいテキストでは、翻訳の問題や翻訳者の葛藤が生まれにくいだろう。なぜなら、こうしたテキストでは、ある程度言語形式を犠牲にしても、その内容を伝えることでその目的を達することが可能となるためである。一方で、詩などの文学作品に代表されるような、言語の道具化を拒否する、あるいは抵抗するテキストでは、言語形式が内容と一体化し、内容そのものになる。そうしたテキストの場合には、より2言語間の差異が強調され、葛藤の度合いが強まると考えられる。

これをReiss(1981/2004)のことばで言い換えるならば、表出的なテキスト(Expressive text)を訳す場合、原文テキストの表現の方法、すなわち言語形式へと翻訳が志向するため、翻訳不

可能性が前景化され、葛藤の度合いが強まる、ということである。端的に言えば、表出機能が優勢なテキストの代表である詩を訳す場合には、新聞記事などの叙述機能が優勢なテキストを訳す場合に比べて、ことばへのこだわりの惹起の程度が強まるのではないかと考えられる。

Zabalbeascoa (1997) が指摘するように、これまでこうした理論的な論考がなされてきた一方で、実証的な研究は十分に蓄積されていない²。また石原 (2009) では、文学的テキストを対象に、実証的データをもとにテキストの文体的特徴と協力者の気づきについて記述しようとしたが、詩と小説、あるいは別のテキストを共通の枠組みで比較することが課題として指摘されている。

こうした背景を踏まえ、本稿では、テキストジャンルによる翻訳プロセスの違いについて、実際に協力者に翻訳タスクを課し、事後的に収集される回顧的な内観報告をもとにした計量的な比較分析を行うこととする。そうすることで、翻訳プロセスにおけることばへの気づきや葛藤の様子を、テキストジャンルによる違いという観点から相対的に記述することを目指す。

3 方法

3.1 調査課題

本研究の目的は、テキストジャンルによって翻訳プロセスがどう異なるのかを計量的に比較分析することである。なるべく多角的な検討を行うための観点を設定することに留意し、以下の4つをリサーチクエスチョン (RQ) とした。

- RQ1. テキストにより、翻訳の処理単位は異なるか
- RQ2. テキストにより、訳出のために立ち止まる語彙レベルに差があるか
- RQ3. テキストにより、翻訳の志向性は異なるか
- RQ4. テキストにより、こだわりの深さは異なるか

RQ1 は翻訳の処理単位についての観点である。翻訳プロセスは大きく分けて理解と訳出の2つの側面がある。それぞれの下位項目として、語 (1 語以内) レベル、文 (2 語以上 1 文以内) レベル、状況 (2 文以上) レベルを設定した。処理単位の指標は Gerloff (1986a) や Kiraly (1995) などでも用いられており、翻訳プロセスの違いを端的に計量化することができると考えられる。ただしこの観点のみでは処理の深さや気づきの種類を考慮しきれないため、RQ2 以降の観点により、何をどのように考えていたかについても、可能な限り計量化することを目指す。

RQ2 は語彙レベルについての観点である。この観点は、RQ1 の処理単位と相補的に捉えることができる。先の処理単位のうち、計量化が簡易である語レベルの訳出に焦点を当て、協力者が訳出に際してどのような語に立ち止まるかについて、語の難易度という観点から明らかにする。

RQ3 は翻訳の志向性についての観点である。石原 (2008) では、小説の翻訳プロセスについて、原文に即して文字通り訳すことと、分かりやすく自然な日本語にしようとする事との間で葛藤が生じている様子が、質的な手法により明らかにされた。この点を踏まえ、「原文志向」と「訳文志向」の2極を設定し、テキストジャンルにより志向性が異なるかどうかを検討する。平子 (1999) が指摘するように、詩などの文学的文章は、原文の形式に忠実に訳そうとされ、一方

説明的文章は、情報伝達のための分かりやすい訳文生成に志向すると予想される。

RQ4 はこだわりの深さについての観点である。英語教育の中で翻訳タスクを扱うことの利点の1つは、学習者にことばへの気づきという経験を与えるということである(Zabalbeascoa, 1997)³。ここでは、どのジャンルのテキストが翻訳の際によりこだわるのが可能であるのかを明らかにすることを目的とし、指標として(a)所要時間、(b)訳の修正回数、(c)既知語に対する辞書の使用、(d)文体への言及、(e)気づきの総計の5つを設定する。このうち(a)、(b)及び(e)の3つの指標は、熟達者の方が意思決定に時間をかける傾向にあり、必ずしも経験をつんだ翻訳者が翻訳という活動を簡単を感じるわけではないという Jääskeläinen (1996)の指摘を踏まえている。すなわち、訳にこだわればこだわるほど、長く考え、また修正を繰り返すことになると考えられる。(c)既知語に対する辞書の使用についても、適切な訳語を探したり、深く理解しようとする態度の表れであり、訳にこだわるほど参照回数が増えると考えられる。(d)文体への言及は、訳語の一貫性を調整したり、起点テキストの文体的特徴を指摘したりするなど、テキストジャンルにおける言語使用にかかわる気づきである。

3.2 協力者

協力者は21名の大学生である。そのうち6名が詩を、6名が小説を、9名が新聞記事を訳した。全員が英語の教員免許状取得を目指しており、英米文学を専攻としないながらも、文学作品講読に関連する授業の履修経験があった。翻訳及び通訳に関する専門的な教育を受けた経験はなかった。

比較的長時間に及ぶ課題に取り組むことや、インタビューでリラックスして話す必要があることを考慮し、調査者の知り合い(後輩)に依頼し、協力を得た。

協力者のTOEICテストの得点は、調査後の質問紙での回答がなかった1名を除いて、700点から910点($M = 817$; $SD = 51$)であり、協力者21名中17名は英検準1級、1名は英検1級取得者であった。

3.3 テキスト

テキストは、詩、小説、新聞記事というジャンルの異なる3種類のテキストである。テキストの選択に際しては、それぞれのジャンルの特徴を十分備えていると考えられるいくつかの候補のうちから、実現可能性を考慮し、全文を提示することができるような短さで、理解が困難すぎず、かつ訳す際に葛藤が生じるようなものを選んだ。

詩テキストとして、イギリスのロマン派詩人バイロン(G. G. Byron)の“When We Two Parted”(1808)を用いた。小説テキストとして、アメリカ人作家カーヴァー(R. Carver)の“Popular Mechanics”(1982)を用いた。新聞記事テキストとして、ウェブ上の記事であるThe ASAHI Shimbunの“The Colorless Ink That Causes a Riot of Colors”(2007, Sep.27)を用いた。それぞれのテキストの課題部分は付録を参照されたい。

時間的な都合から、全文を提示した上でその一部(どのテキストも最後の箇所)を翻訳タスクの範囲とした。

表 1 タスク範囲内の語数と語彙レベル

	<i>M</i>	<i>SD</i>	JACET8000 語彙レベル(度数と百分率の併記)									合計
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	
詩	2.06	2.06	24 (72.7)	2 (6.1)	1 (3.0)	0 (0.0)	2 (6.1)	2 (6.1)	1 (3.0)	1 (3.0)	0 (0.0)	33 (100)
小説	1.15	0.44	53 (88.5)	5 (8.2)	2 (3.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	60 (100)
新聞 記事	2.48	2.60	43 (66.2)	5 (7.7)	2 (3.1)	2 (3.1)	3 (4.6)	3 (4.6)	1 (1.5)	0 (0.0)	6 (9.2)	65 (100)

注. 括弧内の数値は百分率による表記である。

JACET8000 の語彙リストに含まれない語はすべてレベル 9 とし、's などは省いた。

テキストの内容や、全体の長さ(総語数: 詩 144 語; 小説 496 語; 説明文 274 語)、タスク範囲の長さ(詩 33 語; 小説 60 語; 説明文 65 語)は、それぞれに異なるが、表 1 に示されるように、どのテキストも JACET8000 の語彙リストのうちのレベル 1 と 2 の語彙によって 7 割以上 (token: 詩 75%; 小説 93%; 説明文 71%) がカバーされており、詩や説明文では難易度の高い語彙がある程度の割合で出現するものの、本調査の協力者の語彙サイズや英語力を考慮すると、辞書があればそれほど困難なく読めると考えられた。

3.4 データ収集

データ収集のため、一人ずつ部屋に来てもらうという面談形式での調査実験を行った。

本研究の趣旨などを説明した後、まず全文を提示して 10 分間の内容理解の時間をとった。その後、課題範囲のみを拡大コピーした用紙を 2 枚(下書き用と清書用)手渡し、「この部分を訳してください」という教示を与えた。

協力者がタスクを遂行している横で、調査者は、ビデオカメラによってその手元を撮影した。その際はなるべく邪魔にならないよう配慮した。なお、翻訳課題遂行に際して、協力者は自由に辞書を使用することができた。時間制限も設けなかった。

分析の対象となる内観の収集には、刺激再生法を援用した回顧法を用いた。具体的には、タスク終了後、協力者と共に課題遂行中に撮影した映像を見ながら、立ち止まって考えている箇所、訳を修正している箇所、辞書を引いている箇所、訳を飛ばしている箇所、何度も読み返している箇所などで、逐一ビデオを止め、何を考えていたのかを尋ねていった。そうして協力者の内観による言語報告を収集し、ボイスレコーダで録音した。その後、音声データをすべて文字に起こし、分析の対象とした。分析対象となった協力者の発言回数は合計 807 回であった。

3.5 データ分析

データの分析に際しては、まず、回顧法によって得られた全ての言語報告を、協力者ごとに文字化し、質的研究の手法を参考にした分析シート(図 1)を作成した。シート中の発話者の列の R は調査者(Researcher)を、A は協力者の 1 人である協力者 A を示しており、発言ごとに通し番号を振った。

RQ1 の「翻訳の処理単位」については、理解と訳出の二分法と処理単位に注目し、表 2 に示した 7 つに分類した。

分類の信頼性を確保するため、2 名の評定者(うち 1 名は調査者)が独立して、3 名分の発話プロトコル(詩、小説、新聞記事それぞれ 1 名分ずつ)を分類した。分類した発話は合計で 82 回であり、全ての発話の約 10 %であった。評定の依頼に際しては、研究の目的、データの説明、翻訳テキストの説明、分類する各カテゴリの説明などを行い、「発話者」と「発話」の列のみが埋まっている分析シートを渡した。2 名の評定者は独立して、「該当箇所」と「キーワード」の列に入力を行い、協力者の発話に対して a から g までのカテゴリ番号を付した。評定者 2 名の分類の一致率を示すカッパ係数を求めたところ、 $\kappa = .72$ であり、ほぼ一致していると結論づけられたため、残りはすべて調査者が 1 名で分類した。

図 1 分析シートの例(抜粋)

発話者	発話	該当箇所	キーワード	分類
...	
R4	そのあと 2 文目、In silence I grieve まで読んだ後に、そこでまたちょっと読んだ後に考えてるんだけど、2 文目読んだ後は、何を考えているんですか？			
A4	Grieve の意味がちょっと分からなかったので、どういう意味かなって推測しようと思ったんですけど、まあ、でも辞書を引こうかなと思いました。	Grieve	語の意味推測	a
R5	その後 3 文目、That thy heart could forget まで読んだ後、に、またちょっと考えているんだけど、その 3 文目を読んだ後は、何を考えているんですか？			
A5	3 文目、読んだ後は、あ、たぶん、うん、何考えているかな？あ、たぶん、Grieve that, that, grieve that って、said that みたいな、Told that とかの、that かなあって思って、で、先にやっぱり grieve を(辞書で)引こうと思って、で、grieve を引きました。	Grieve that	語のつながり	b
...	

表 2 翻訳の処理単位の分析カテゴリ

カテゴリ	具体例
a 語レベルの理解	語の意味や用法を考える、未知語を辞書で調べるなど
b 文レベルの理解	一文の構造を把握する、動詞を探す、スラッシュをつけるなど
c 状況レベルの理解	状況や動作、場面などをイメージする、代名詞の理解など
d 語レベルの訳出	訳語を考える、訳語を探すために辞書を調べるなど
e 文レベルの訳出	主語を省略する、語尾を修正する、文や句の訳を考えるなど
f 状況レベルの訳出	訳文全体を見直す、訳語の一貫性を調整するなど
g その他	何を考えていたか忘れた、など

RQ2 の「訳出において立ち止まる語彙レベル」については、先の処理単位のうち、(d) 語レベルの訳出について、テキスト中のどの語に立ち止まっているかを先の分析シートから同定し、JACET 8000 語彙レベルに基づいて分類、比較することで検討した。なお、JACET 8000 の語彙リストに含まれない語はすべてレベル 9 とした。

RQ3 の「翻訳の志向性」については、「原文志向」と「訳文志向」の 2 つの志向性に分類し、それぞれの志向性が読み取れる発話を、先の分析シートから数えた。原文志向が読み取れるものは、例えば「訳し忘れた語を訳す」や「原文に即して訳す」などの発話であり、訳文志向が読み取れるものは、例えば「主語を省略する」や「態を変えて訳す」、「日本語として分かりやすいようにする」などの発話である。

RQ4 の「こだわりの深さ」については、指標として (a) 所要時間、(b) 訳の修正回数、(c) 既知語への辞書使用回数、(d) 文体への言及、(e) 気づきの総数、の 5 つを用いた。(a) 所要時間は、協力者が翻訳タスク遂行にかかった時間を計測した。その際には内容理解およびインタビューの時間は含めなかった。(b) 訳の修正回数および (c) 既知語への辞書使用回数は、先の分析シートをもとに数えた。(d) 文体への言及には、「訳語を一貫させるために修正する」や「テキストジャンルについて言及する」、「用いられている語の特徴を指摘する」など、理解および訳出において文体に関する言及があった箇所を数えた。(e) 気づきの総数は、協力者による発話の総数を数えた。なお、RQ2、RQ3、RQ4 の各観点の計量化は調査者が 1 名で行った。

4 結果と考察

4.1 翻訳の処理単位について

RQ1 である翻訳の処理単位について、累計生起数と比率を表 3 及び図 2 にまとめた。なお、ここではすべての協力者の気づきをテキストごとにのべ数として算出しており、「その他」のカテゴリは対象外としている。「その他」の生起数は、詩 7 回、小説 11 回、説明文 14 回であった。

表 3 テキストごとにみた各処理単位の累計生起数と比率 (N = 21)

	理解			訳出			総計
	a 語	b 文	c 状況	d 語	e 文	f 状況	
詩 (n = 6)	31 (11.0)	37 (13.1)	22 (7.8)	76 (27.0)	89 (31.6)	27 (9.6)	282 (100)
小説 (n = 6)	32 (13.9)	27 (11.7)	16 (7.0)	47 (20.4)	86 (37.4)	22 (9.6)	230 (100)
新聞記事 (n = 9)	52 (19.8)	45 (17.1)	17 (6.5)	81 (30.8)	54 (20.5)	14 (5.3)	263 (100)

注. カッコ内はテキストごとの生起率 (%) を示す。

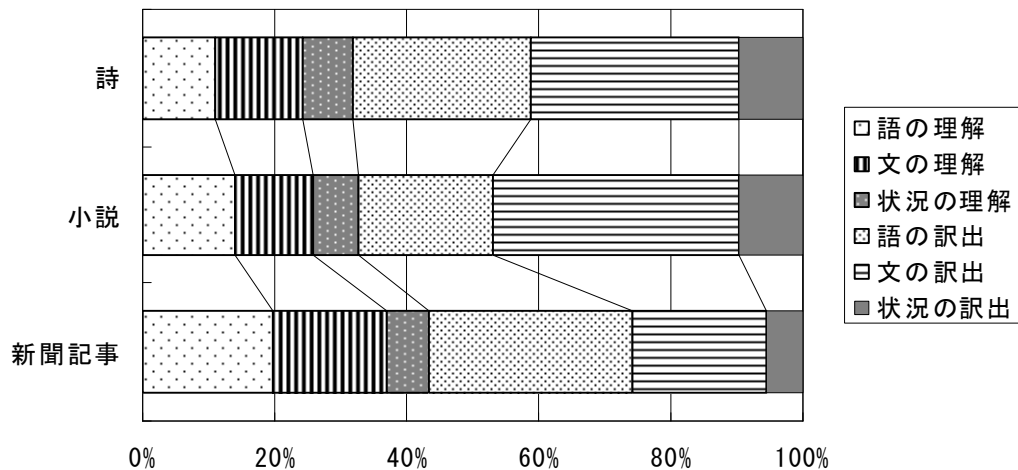


図 2 テキストごとにみた処理単位の生起率

全体的にみると、理解に比べて訳出に関する気づきが多く報告されている。中でも詩と小説のテキストは、理解と訳出の気づきの生起率の差が大きい(理解: 訳出 = 3 : 7)。これは、理解が即座に訳出に結びつくのではなく、理解した上でさらに訳出を考え直す、あるいは修正する必要に迫られたためであると考えられる。一方で新聞記事のテキストは、詩や小説に比べて訳の割合が小さいものの、それでも訳出の段階で気づきが多く生じている。これは翻訳タスクと内容理解タスクの違いを示唆しているといえる。これまで英語教育における英文和訳の議論では、もっぱらその内容理解の段階に注意が向けられていたが、この結果が示すように、翻訳において協力者らは、むしろ訳出の段階でより多く立ち止まり、考えている。この訳出の段階に注目して英文和訳を捉え直すことは、実りの多い議論につながると考えられるだろう。

小説の翻訳では、訳出の中でも特に文レベルの気づきが多く生じているようであった。これは、本調査で扱ったテキストにおける文体的特徴(例えば主語の繰り返しや単文の連続など)に起因していると考えられる。小説を訳した協力者らは、2 文を繋げたり、主語を省略したりするなど、文レベルで訳文の読みやすさに関わる操作を多く行っているようであった。

詩や新聞記事の翻訳では、語の訳出について比較的高い割合で気づきが生じていた。これは、両テキストに難易度のやや高い語（例えば *deceive* や *manipulate* など）や、そのジャンルに顕著な語（例えば *thy* や *molecular* など）が出現したため、そうした語の訳出に慎重になったためであると考えられる。この点に関しては次項で詳しく検討する。

また、それぞれのテキストごとに、各カテゴリの生起数の平均をまとめたのが表 4 である。それぞれのカテゴリについて、3 つのテキスト間に有意な差があるか、クラスカル・ウォリス検定により検討した。その結果、語の理解 ($p = .88$)、文の理解 ($p = .67$)、状況の理解 ($p = .72$)、語の訳出 ($p = .15$)、文の訳出 ($p = .09$)、状況の訳出 ($p = .17$) で、すべてのカテゴリにおいて有意な差はみられなかった。

表 4 テキストごとにみた各処理単位の生起数 ($N = 21$)

		詩 ($n = 6$)		小説 ($n = 6$)		新聞記事 ($n = 9$)		χ^2	p
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
理解	語	5.17	3.92	5.33	2.73	5.78	3.49	0.26	.88
	文	6.17	3.37	4.50	2.26	5.00	3.54	0.81	.67
	状況	3.67	4.23	2.67	2.73	1.89	1.36	0.67	.72
訳出	語	12.67	3.67	7.83	3.66	9.00	4.82	3.80	.15
	文	14.83	11.96	14.33	12.85	6.00	3.84	4.75	.09
	状況	4.50	3.39	3.67	3.62	1.56	1.74	3.56	.17

注. 自由度はすべて 2 である。

4.2 立ち止まる語彙レベルについて

4.1 では、特に詩と小説の翻訳に際して、語を訳すレベルで比較的多く立ち止ることが明らかとなった。しかし、両テキストの当該語彙を詳しく見てみると、新聞記事では比較的難しい語に、詩では比較的簡単な語に繰り返し立ち止まるようであった。この点を詳しく検討するため、RQ2 として、訳出の際に立ち止まる語彙の難易度を比較検討した。

表 5 は、先の「語の訳出」のカテゴリについて、その対象となる語の語彙レベルをテキストごとにまとめたものである。協力者数が異なるため単純な比較が難しいが、生起数をみると、どのテキストにおいても立ち止まる語がレベル 1 およびレベル 2 に集中している。これは、表 1 で示されるように、それぞれのテキストがこれらの語彙レベルで構成されていたためである。

しかし丁寧に語の種類を検討すると、新聞記事にはレベル 9 に分類されるような専門用語やそれに準ずる語（例えば *rare-earth* や *ultraviolet*, *molecular* など）、あるいはレベル 4 以上の語（例えば *encircle* や *emit* など）に、相対的に多く立ち止まっていた。その一方で、詩のテキストでは比較的易しいと考えられる語（例えばレベル 1 の語である *silence* や *secret* など）の訳出について、多くの気づきが生じていた。

表 5 訳に際して立ち止まった語の語彙レベル

	<i>M</i>	<i>SD</i>	JACET8000 語彙レベル(度数と百分率の併記)									合計
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	
詩 (<i>n</i> = 6)	1.80	1.76	57 (75.0)	4 (5.3)	8 (10.5)	0 (0)	1 (1.3)	0 (0)	5 (6.6)	1 (1.3)	0 (0)	76 (100)
小説 (<i>n</i> = 6)	1.21	0.41	37 (78.7)	10 (21.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	47 (100)
新聞記事 (<i>n</i> = 9)	3.89	3.20	23 (28.4)	26 (32.1)	0 (0)	3 (3.7)	5 (6.2)	3 (3.7)	2 (2.5)	0 (0)	19 (23.5)	81 (100)

注. 括弧内の数値は百分率による表記である。

JACET8000 の語彙リストに含まれない語はすべてレベル 9 とし、's などは省いた。

表 1 から読み取れるように、詩と新聞記事にはどちらも同じようにレベルの高い語が何語か含まれていたが、訳出に際して立ち止まる語については、上述したような差が生じていた。これは、詩のテキストにおいては、協力者が一読して理解したと思った後の訳す段階で、さらなる深い読みや意味の再認識の必要性に迫られたためであると考えられる。詩テキストでは、一見簡単な語が *In secret we met* / *In silence I grieve* のように構造的に並置されることや、最後の *In silence and tears* が第一連の *With silence and tears* との関連の中で解釈する必要があることなどがきっかけとなり、語彙レベルの低い比較的簡単な語(例えば *secret* や *silence*, *In* や *with* など)に何度も立ち止まるのである(より詳細な分析は、石原(2009)を参照されたい)。

一方新聞記事では、訳語をいくつか比べながら決定を下すというよりは、辞書の訳語をそのまま当てはめるという様子が多いようであった。協力者は、未知語である化学系の用語などを辞書で調べるためや、多義語の文脈における意味を確認するために立ち止まるが、一旦訳を確定した後は、特に繰り返し立ち止まる必要を感じなかったと考えられる。

なお小説は、レベル 1 及びレベル 2 の語彙でテキストの 9 割以上が構成されており、レベル 3 以上の語に対する気づきが生じにくかった。

それぞれのテキストにおいて、立ち止まる語彙レベルが異なるかを、クラスカル・ウォリス検定によって検討した。その結果、3 つのテキスト間に有意な差がみられた($\chi^2(2, N = 21) = 43.99, p < .001$)。さらにどのテキスト間に有意な差があるかを検討するため、ライアンの方法によって水準を調整した上で、マンホイットニーの U 検定を 1 対ごとに繰り返した。その結果、詩と小説($U = 1587.50, p = .18$)の間には有意な差がみられず、詩と新聞記事($U = 1785.50, p < .001$)および小説と新聞記事($U = 785.50, p < .001$)の間に有意な差がみられた。すなわち、新聞記事の翻訳に際して立ち止まった語彙レベルは、詩や小説のそれに比べて有意に高いことが示された。

4.3 翻訳の志向性について

RQ3の翻訳の志向性については、協力者の発話の中で明示的に言及された回数を数えた。その結果は表6に示されている。

表6 テキストごとにみた翻訳の志向性 (N = 21)

	詩 (n = 6)		小説 (n = 6)		新聞記事 (n = 9)		χ^2	p
	M	SD	M	SD	M	SD		
原文志向	2.17	1.60	1.67	0.82	1.22	1.30	1.49	.47
訳文志向	1.83	1.47	4.83	7.00	4.78	4.41	2.95	.23

注. どちらも自由度は2である。

生起数から解釈すると、小説や新聞記事の訳に際しては、原文志向に比べて訳文志向が強く現れるという結果になった。逆に詩は、訳文志向よりも原文志向が強いようであった。しかし、原文志向、訳文志向それぞれについて、テキスト間の差をクラスカル・ウォリス検定によって検討した結果、原文志向 ($\chi^2(2, N = 21) = 1.49, p = .47$)、訳文志向 ($\chi^2(2, N = 21) = 2.95, p = .23$)ともに、有意な差が検出されるには至らなかった。

この点についての可能な解釈の1つとしては、どのようなジャンルのテキストにおいても、ある程度両方の志向性の間での葛藤が生じるためであると考えることができる。つまり、詩を訳す際には、原文に忠実に訳そうとすると同時に、訳文の分かりやすさにも気を配り、また、新聞記事を訳す際にも、分かりやすさに志向しながらも、原文への忠実さも無視できない、というように、相反する態度が観察されたのである。

もう1つの可能性としては、協力者の発話の中に明示的に現れたものを数え上げる方法により計量化したことが原因となり、無自覚的に原文に忠実に、あるいは訳文が分かりやすいように訳出した箇所が十分に計量化されなかったということが指摘できる。つまり、実際に訳された文章の中に、協力者の内観で言及された気づきがどれほど表出しているかという点に、さらなる検討の余地がある。この点については、本稿の射程を越えるため、今後の課題として指摘するに留めるが、産出された翻訳プロダクトと協力者の内観報告の関係性についての分析が必要であろう。

4.4 こだわりの深さについて

RQ4のこだわりの深さについては、(a)所要時間、(b)訳の修正回数、(c)既知語に対する辞書使用回数、(d)文体への言及、(e)気づきの総数を指標として検討した。その結果は、表7にまとめられている。

表 7 テキストごとにみたこだわりの深さに関する各指標の記述統計 ($N = 21$)

	詩 ($n = 6$)		小説 ($n = 6$)		新聞記事 ($n = 9$)		χ^2	p
	M	SD	M	SD	M	SD		
所要時間	868.33	517.60	846.67	384.53	676.43	181.38	0.18	.91
訳の修正	8.67	5.47	9.17	10.25	4.11	4.11	3.36	.19
辞書使用	7.17	6.24	5.17	2.48	1.78	1.39	7.99	.02
文体	5.17	4.50	1.83	1.47	0.78	1.09	6.63	.04
気づき	48.17	22.7	40.17	18.2	34.63	12.5	3.08	.21

注. 自由度はすべて 2 である。

各指標について、クラスカル・ウォリス検定を行った結果、辞書使用の回数 ($\chi^2(2, N = 21) = 7.99, p = .02$) および文体への言及 ($\chi^2(2, N = 21) = 6.63, p = .04$) について、テキスト間に有意な差が認められた。一方、所要時間 ($\chi^2(2, N = 21) = 0.18, p = .91$)、訳の修正回数 ($\chi^2(2, N = 21) = 3.36, p = .19$)、気づきの総数 ($\chi^2(2, N = 21) = 3.08, p = .21$) については有意な差がみられなかった。

辞書使用および文体への言及について、どの組み合わせの間に差があるかを検討するため、ライアンの方法によって有意水準を調整した上で、マンホイットニーの U 検定を 1 対ごとに繰り返した。その結果、辞書使用については、詩と新聞記事 ($U = 8.0, p = .02$) および小説と新聞記事 ($U = 6.5, p = .02$) の間に有意な差がみられ、詩と小説 ($U = 17.0, p = .87$) の間には有意な差がみられなかった。文体への言及については、詩と新聞記事 ($U = 8.0, p = .02$) に有意な差が見られ、詩と小説 ($U = 9.0, p = .15$) および小説と新聞記事 ($U = 14.5, p = .12$) は有意な差が見られなかった。

文体に関する言及と辞書の使用回数の 2 つの指標については、詩の翻訳に際して、ことばにこだわる度合いが強ことが示唆された。これは、先にも言及したように、一見簡単な語やフレーズが平行性を持って出現することにより、形式的な等価にも注意を払いながら訳出したり、テキスト中の他の箇所との関連の中で訳出したりする必要性が生じ、その結果、協力者は繰り返し立ち止まり、訳を見直しながらか訳出していったと考えられる。

また、有意な差が検出されなかった所要時間、訳の修正回数、気づきの総数の 3 つの指標についても、詩 > 小説 = 新聞記事、ないしは詩 = 小説 > 新聞記事という同様の傾向が見られた。こうした点を総合的に判断すると、テキストによることばへの気づきの惹起の度合いについて、(1) 詩は翻訳に際して最もことばへのこだわりが生じやすいテキストである、(2) 新聞記事はこだわりが生じにくいテキストである、(3) 小説は詩と新聞記事の中間的な特徴を持ったテキストである (こだわりが生じやすい側面とこだわりが生じにくい両方の側面がある)、と結論づけることができるだろう。

5 おわりに

本稿では、テキストジャンルによる翻訳プロセスの違いについて、量的な側面からの検討を行った。その結果、詩、小説、新聞記事の翻訳プロセスが、計量的データによって相対的に明らかにされた。

新聞記事の翻訳プロセスにおいては、内容の理解が即座に訳出につながるようであった。その意味で新聞記事は、ことばへの気づきの惹起の度合いが比較的弱く、翻訳における葛藤が生じにくいテキストであると言える。

一方で詩は、一見理解が簡単に思われる語彙の訳出にも、多く立ち止まっていた。また、総じて多くの気づきを引き起こしているようであった。これは、内容と同時に形式の翻訳を迫る表出的テキストの特徴であると考えられる。

小説は、計量化の観点により、詩に近い数値が得られた場合と、新聞記事に近い数値が得られた場合が混在する結果となった。これは、小説が両者の中間的なテキストであるためであろう。

理論的背景を踏まえて考察すると、こうしたこだわりの要因の1つとして、テキストの機能を指摘することができる。新聞記事は一般的に叙述機能の優勢なテキストであるため、情報の伝達が主要な目的となり、言語形式が必要に応じて捨象される。一方詩は、表出機能が優勢なテキストであり、訳す際には、内容に加えて形式をも翻訳することを迫る。言語形式の対応は、日英間で言語構造(例えば語順など)が異なるため、実現することが難しい場面が多く、結果として、翻訳の難しさ(あるいは翻訳不可能性)が前景化され、よりことばにこだわって訳す必要が生じてくるのである。

小説が詩と新聞記事の中間的な特徴を持つようであった点を踏まえると、ことばへの気づきの惹起の度合いについては、「文学」対「非文学」、あるいは「文学」対「説明文」として二項対立的に捉えるより、ある種の段階性を持った連続体として捉えるほうが妥当であろう。また、新聞記事のような叙述的なテキストの中にも表出機能の強い部分があり、また詩のような表出機能が優勢なテキストにおいても、叙述機能を持たないわけではない。この点にも留意する必要がある。

今後の課題としては、プロダクトの側面から再検討を行う必要があると考えられる。特に RQ3 の翻訳の志向性についての分析結果は、生起数では、詩の翻訳に際しては原文志向が多く、逆に小説や新聞記事の翻訳に際しては訳文志向が多かったが、統計的な有意差が検出されるには至らなかった。この点について、相反する翻訳の志向性が観察されたという意味で妥当な結果であるとも考えられるが、今後、プロダクトの側面から検討を加えることで、どのテキストにおいて、どういう志向性が優勢であったのかを議論する必要があるといえる。

.....

【著者紹介】

石原知英 (ISHIHARA, Tomohide) 愛知大学経営学部助教。2010年3月に広島大学大学院教育学研究科博士後期課程を修了、博士(教育学)。学位論文は「翻訳における言語意識—プロセ

スの記述とプロダクトの評価をめぐって」。

【註】

1. 本稿は、第 35 回全国英語教育学会鳥取大会において、「テキストジャンルによる翻訳プロセスの違いー量的側面からの検討ー」というタイトルで口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。
2. 実証的研究としては、発話思考法による内観や、課題遂行時のペンの動きなどを分析した研究として、Atari (2005)、Gerloff (1986a, 1986b)、Hansen (2005)、Kiraly (1995, 1997)、Krings (1986) などがある。
3. Zabalbeascoa (1997, p.122) は “translation practice can be used as a resource for the promotion of language learning and as such many activities and exercises can be used to develop language awareness” と述べ、英語 (外国語) 教育における翻訳タスクの意義を指摘している。日本における英語教育の文脈では、大津 (1998) を発端として、最近では大津・窪菌 (2008) に至る一連の主張により、ことばへの気づきという概念を基盤とした、母語に関連づけた外国語学習の意義が議論されている。

【引用文献】

- Atari, O. (2005). Saudi students' translation strategies in an undergraduate translator training program. *META*, 50, 180-193.
- Gerloff, P. (1986a). Identifying the unit of analysis in translation: some use of think-aloud protocol data. In C. Fearch. & G. Kasper. (Eds.), *Introspection in second language research* (pp.135-158). Clevedon and Philadelphia: Multilingual Matters Ltd.
- Gerloff, P. (1986b). Second language learners' reports on the interpretive process: Talk-aloud protocols of translation. In J. House, & S. Blum-Kulka. (Eds.), *Interlingual and intercultural communication: Discourse and cognition in translation and second language acquisition studies* (pp.243-262). Tübingen: Narr.
- Hanauer, D. (1999). Attention and literary education: A model of literary knowledge development. *Language Awareness*, 8, 15- 29.
- Hanauer, I. D.(2001). The task of poetry reading and second language learning. *Applied Linguistics* ,22, 295-323.
- Hansen, G. (2005). Experience and emotion in empirical translation research with think aloud and retrospection. *META*, 50, 511-521.
- Holmes, J. S. (1978/1994). Describing literary translations: Models and methods. In *Translated!: Papers on literary translation and translation studies* (2nd Ed., pp. 81-91). Amsterdam: Editions Rodopi. (Reprinted from *Literature and translation: New perspectives in literary studies*, pp. 69-82, by J. S. Holmes, J. Lambert, & R. van den Broeck, Eds., 1978, Leuven: Acco)

- Jääskeläinen, R. (1996). Hard work will bear beautiful fruit. A comparison of two think-aloud protocol studies. *META*, 41, 60-74.
- Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 350-377). Cambridge, MA: The MIT Press.
- Kiraly, D. C. (1995). *Pathways to translation: Pedagogy and process*. Kent, Ohio: The Kent State University Press.
- Kiraly, D. C. (1997). Think-aloud protocols and the construction of a professional translator self-concept. In J. H. Danks, G. M. Shreve, S. B. Fountain, & M. K. McBeath (Eds.), *Cognitive process of translation and interpreting* (pp. 137-160). California/London: SAGE Publications.
- Krings, H. P. (1986). Translation problems and translation strategies of advanced German learners of French (L2). In J. House & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlingual and intercultural communication: Discourse and cognition in translation and second language acquisition studies* (pp. 263-276). Tübingen: Narr.
- Miall, S. D. and Kuiken, D. (1994). Foregrounding, defamiliarization, and affect: Response to literary stories. *Poetics*, 22, 389-407.
- Miall, S. D. & Kuiken, D. (1995). Aspects of literary response: A new questionnaire. *Research in the teaching of English*, 29, 37-58.
- Mukarovskiy, J. (1932/1964). Standard language and poetic language. In P. L. Garvin (Ed. & Trans.), *A Prague school reader on esthetic, literary, structure, and style* (pp. 17-30). Washington: Georgetown University Press.
- Reiss, K. (1981/2004). Type, kind and individuality of text: decision making in translation. (Kitron, S. Trans.) In L. Veniti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed., pp.168-179). London: Routledge.
- Rosenblatt, M. L. (1978). *The reader, the text, the poem: The transactional theory of the literary work*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press.
- van Peer, W. (1983). Poetic styles and reader response: An exercise in empirical semics. *Journal of Literary Semantics*, 12, 3-18.
- Vipond, D. & Hunt, A. R. (1984). Point-driven understanding: pragmatic and cognitive dimensions of literary reading. *Poetics*, 13, 261-277.
- Zabalbeascoa, P. (1997). Language awareness and translation. In L. van Lier & D. Corson (Eds.), *Encyclopedia of language and education, volume 6: Knowledge about language* (pp. 119-130). Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Zwaan, R. (1996). Toward a model of literary comprehension. In B. Britton & A. Graesser (Eds.), *Models of understanding text* (pp. 241-255). New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- 石原知英 (2008) 「学習者の内観による文学テキスト翻訳プロセスの記述—英語教育への示唆として—」『通訳翻訳研究』第 8 号, 209-228.

- 石原知英 (2009) 「翻訳過程における学習者の「葛藤」の記述—G. Byron “When we two parted” を題材にして—」『通訳翻訳研究』第 9 号, 235-251.
- 大津由紀雄 (1998) 「学校英語教育が本当にやらなくてはならないこと」『関西英語教育学会紀要』第 21 号, 1-8.
- 大津由紀雄・窪菌晴夫 (2008) 『ことばの力を育む』慶應義塾大学出版会
- シクロフスキイ, V. (1917/1988) 「手法としての芸術」桑野隆・大石雅彦 (編) 『ロシア・アヴァンギャルド 6 フォルマリズム 詩的言語論』国書刊行会
- ビューラー, K. (1934/1983) 『言語理論 言語の叙述機能(上)』(脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子 訳)クロノス
- 平子義雄. (1999) 『翻訳の原理—異文化をどう訳すか』大修館書店
- ムカジヨフスキー, J. (1938/1982) 「詩的な意味表現と言語の美的機能」平井正・千野栄一 (訳) 『チェコ構造美学論集 美的機能の芸術社会学』(pp.57-72) せりか書房

付録 翻訳テキストの課題範囲

(1) 詩

In secret we met—

In silence I grieve,

That thy heart could forget,

Thy spirit deceive.

If I should meet thee

After long years,

How should I greet thee?

With silence and tears.

(2) 小説

No! she screamed just as her hands came loose. She would have it, this baby. She grabbed for the baby’s other arm. She caught the baby around the wrist and leaned back.

But he would not let go. He felt the baby slipping out of his hands and he pulled back very hard.

In this manner, the issue was decided.

(3) 新聞記事

They encircled the element with organic compounds that can collect light from ultraviolet rays, and manipulated them at the molecular level. As a result, the rare-earth metal’s ability to emit red light was heightened 100 to 1,000 times.

The colorless ink can be printed even on glass or vinyl. Three-dimensional objects that shine in red can be made from the ink mixed into transparent plastic.